

調 査

伊東市観光ヒアリング調査報告⁽¹⁾

石橋太郎・野方 宏

1. はじめに

本ヒアリング調査報告は、静岡大学人文学部経済学科の教員を中心とした観光研究プロジェクト・チームが実施した第4回目の報告である⁽²⁾。ヒアリング調査先は静岡県伊東市役所観光課であり、2005年12月16日に実施した。主たる調査項目は次の通りである。

- (1) 観光統計関連資料の入手および最近の観光動向
- (2) 外国人観光客の誘致活動と受け入れ状況
- (3) 広域観光への取り組み
- (4) 独自の取り組み（観光資源の活用、ブランド化事業など）
- (5) 行政の観光支援活動

2. 伊東市役所観光課におけるヒアリング

日 時 2005年12月16日

対応者 伊東市観光課課長肥田義則氏、同課石川貴士氏および企画政策課
主査中村一人氏

以下に、先に示した調査項目に対応する形でヒアリング調査をまとめておく。

⁽¹⁾ ヒアリング調査に協力していただいた、伊東市観光課課長肥田義則氏、同課石川貴士氏、企画政策課主査中村一人氏、またヒアリングの後半に出席頂いたハトヤホテル総支配人瀬戸常弘氏、同課長村松篤実氏、株式会社サボテンパークアンドリゾート副社長菊池勉氏にお礼申し上げる。

⁽²⁾ これまでの3回のヒアリング調査報告は、野方宏「熱海観光ヒアリング調査報告」（静岡大学経済研究センター『研究叢書』第3号、2005年3月）、野方宏「浜松・館山寺温泉観光ヒアリング調査報告」（静岡大学『経済研究』10巻1号、2005年7月）、石橋太郎「由布院温泉ならびに黒川温泉の観光ヒアリング調査報告」（静岡大学経済研究センター『研究叢書』第4号、2006年3月）である。

(1) 伊東市の最近の観光動向

末尾に掲載した資料1にみられるように、伊東市の観光客数⁽³⁾は平成3年度(2001年)をピークに減少に転じ、その傾向は現在(平成16年度)まで続いている⁽⁴⁾。具体的な数字で示せば、観光客数はピーク時に比べほぼ25%減少し、昭和61年以来18年ぶりに600万人台にまで低下した。

なお、資料としては示していないが、観光客の8割は首都圏(東京、神奈川、千葉、埼玉)からであり、伊東の立地特に交通の便の良さがこうした数字に表れていると考えられる。このことは、伊東までの交通手段の58.8%が鉄道を利用しているという調査結果からも窺えるであろう。因に、静岡県からの観光客は8.7%であり、都道府県別で4位である(数字はすべて平成16年度のものである)。年齢別には40歳台以上の中高年が55%を占めるが、30歳台が22.8%、20歳代が19.8%と年代別では各々1位と2位を占め、幅広い年齢層から誘客ができていていることを示している。また、伊東を訪れた回数が4回以上の観光客が52.8%もあり、こうしたリピーターの多さは立地や観光客の年齢層などと並んで伊東の観光特性を考える上で重要な要因である。

(2) 外国人観光客

資料2にみられるように、外国人観光客の大部分は韓国・中国・台湾からであり、この点は2004年12月にヒアリング調査をした熱海と同じである。しかしながら、熱海とは異なり伊東では台湾からの観光客が圧倒的に多い。例えば、外国人観光客に占める台湾からの観光客の割合をみると、87%(平成13年)、77%(平成14年)、81%(平成15年)、90%(平成16年)であり、「異常なほど」高い数字である。この「数字の異常さ」には理由がある。それは、ハトヤホテルグループの台湾観光客への積極的な誘客の取り組みによる。ハトヤホテルグループの瀬戸氏ならびに村松氏によると、台湾の旅行エージェントは規模が小さくまた人と人との繋がりを大事にする気質を持っていること、そのため年に数回ほど直接先方に営業に出向き、顔つなぎをしつつ信頼関係を維持することが観光ビジネスにつながっているという。実際、2005年12月のヒアリング調査時点で、ハトヤホテルグループには台湾より既に10,000人の観光客が宿泊したとのことであった。

後述のような自治体による外国人観光客向けのインフラの整備やPR活動なども誘客に必要なことはいままでもないが、このような民間の企業による営業努力がこのような誘客効果を持つことについては、正直驚かされると同時に民間のもつパワーの大きさを再認識させられた。

行政レベルでの外国人観光客に対する取り組みとしては、富士・箱根・伊豆国立公園を背景とした神奈川県や山梨県との連携を強化し、広域観光という「面」としての観光をアピールするこ

⁽³⁾ なお、資料1にある遊客数とは宿泊客と日帰り客の合計であり、入込み客数とか観光交流客数などと呼ばれるものと同一である。

⁽⁴⁾ 因に、日本銀行静岡支店の調査によると、静岡県内の観光交流客数は既に2003年度(平成15年度)より増加に転じているとのことである(日本経済新聞2006年3月7日)。

と、あるいは熱海－伊東－下田という伊豆東海岸3市2町としての観光をアピールすることが紹介された⁽⁵⁾。後者については、英語、中国語、韓国語による観光案内地図パンフレットや外国人観光客が一人歩きできるようなパンフレットの作成が既に行なわれている。

また、熱海と同様温泉文化ないし芸妓文化を観光資源として積極的に活用し、海外だけではなく在日の外国人をもターゲットとして広げていきたいとの意欲と具体的行動が紹介された。例えば、芸妓による花の舞やお座敷文化の体験などがあげられた。後者については、平成12年に芸者衆を「教授」に迎えた「伊東温泉お座敷文化大学」が開校され、昨年（2005年）観光地の新たな魅力づくりに貢献した独創的な取り組みが評価され、静岡県観光協会から「第6回しずおか観光大賞」が授与された⁽⁶⁾。

(3) 広域観光

「伊豆は一つ」を合い言葉に官民一体の組織である伊豆観光推進協議会を中心にした誘客活動が紹介されたが、その中で花をキーワードにした観光の可能性が興味深かった。河津町の河津桜はいまや花見の全国区として毎年シーズンには100万人以上の観光客を集めているが、熱海市の梅（熱海梅園）や伊豆の国市の梅（修善寺梅林公園）、伊東市の椿、下田市の水仙など一連の花の見所を観光資源として活用できないかというものである。昨年（2004年）ヒアリング調査を行なった熱海市では「花の都づくり」を計画中とのことであったが、こうした活動を伊豆一帯に広げ、「花に溢れた伊豆」といったコンセプトに基づいた広域観光キャンペーンも考えられるのではないだろうか⁽⁷⁾。

富士・箱根・伊豆については(2)で触れたが、県を超える広域観光の可能性として相模湾をキーワードにしたアイデア、例えば相模湾の海上交通や三浦半島とのヨットレースなども紹介された。またそれと共に行政サイドとしては、県を超えた連携や繋がりに伴う実際上の問題が広域観光の実効性を難しくしている側面があるといった率直な意見も聞かれた。

(4) 独自の取り組みおよび支援活動

伊東市は平成10年度に厚生省より「健康文化都市モデル市町村」の指定を受け、健康保養をキーワードとしたまちづくりが本格的にスタートした。現在は平成18年度からの5年間の事業計画が策定され（「伊東市健康保養地づくり事業計画」）、静岡県のファルマバレー構想などと連動したプログラムが実行に移されている。それら各種の事業のうち、重点的・先導的な事業がリーディン

⁽⁵⁾ 「IZU」という名称は台湾ではよく知られているとのことであった。

⁽⁶⁾ ここでの記述は日本経済新聞2005年5月24日付の記事を参考にした。

⁽⁷⁾ 堂が島を中心とした西伊豆・中伊豆の洋ランも全国的に知られている。

プロジェクトと位置づけられ、次の4つにまとめられている。すなわち、「温泉健康プログラム開発プロジェクト」、「地元健康メニュー開発プロジェクト」、「自然に癒されるスポットづくりプロジェクト」、「健康保養プログラムプロジェクト」の4つであるが、観光はこれら全てのプロジェクトに関わって登場する。

例えば、「温泉健康プログラム開発プロジェクト」では、温泉を利用した市民の健康増進と並んで宿泊客の満足度を高めそれを誘客に繋げたり、温泉地としての魅力を高めたりすることなどが目的として掲げられている。そしてこの目的実現のため、温泉入浴指導員の養成・温泉健康プログラムの開発や温泉を利用した健康・保健施設の研究などの具体的事業内容、これら事業内容を担う関係組織（宿泊関連事業者、医療機関、伊東市など）とその役割の分担、5年という期間の中での各事業のタイムスケジュールなどが具体的に明記されている。

この5か年の事業計画はスタートしたばかりであるが、観光に関してこの事業計画が極めて意欲に富んだ内容を含んでいるのは間違いない。よい成果があがることを期待したい。

上にみた5か年の事業計画におけるいわば「観光のグランド・デザイン」以外に、行政の取り組みとして次のようなコンセプトも紹介された。すなわち、伊東市内には全国有数の滞在型観光地（いわゆるリゾート地）である伊豆高原地区があり⁽⁸⁾、そこには40を超える美術館や博物館、さまざまな家具の工房や陶芸の窯があり、また多くの別荘もある。こうしたリゾート地としての伊豆高原と従来からある温泉街という2つの看板を掲げ、その相乗効果を生かした他所にはない観光地としてのイメージを打ち出そうとするアイデアである。

また、「道の駅伊東マリントウン」は毎年200万人以上が集まる人気スポットであるが、中心商店街からは離れた所に立地していた。そのため、ここを訪れる観光客をいかに街の中心部に誘導するかが従来からの課題であった。2006年1月31日付けの日本経済新聞によれば、伊東市は観光シーズンの6、7月頃より道の駅より中心商店街へ観光客を呼び込む巡回バスの実証実験を行なうとのことである。

(5) おわりに

ヒアリング調査の終盤にある民間会社の経営者の方から次のような意見を伺った。我々もヒアリング調査を通じて同様の感想を持ったこともあり、それをここで記して本稿の締めくくりとしたい。それは、伊豆は景観・立地・交通のアクセスなどどの面をとっても恵まれ過ぎているため、自治体を含めた観光サービス供給者の側に「何を積極的に作り出しアピールしていけばよいのか」

⁽⁸⁾ 日経産業消費研究所によるリゾート地の国内ランキングでは、伊豆高原は魅力ではキロロ、ルスツ（いずれも北海道）と並んで17位、将来性では那須高原（栃木）、大沼（北海道）と並んで11位にランクされている（日本経済新聞2005年11月7日）。

という思考が出て来にくいのではないかと、ということである。

観光客にアピールする温泉と景観に加えたプラス・アルファ、つまり付加価値をいかに創造するか、それが低迷する観光客数を回復させる鍵となるのではなからうか。

資料1 年次別来遊客数推移表

年次	来遊客数 (A)	1日平均 (人)	対前年比 (%)	宿泊客数 (人)	日帰客数		
					(人)	Aに対する割合	
昭和38年	4,030,000	11,041		2,360,800	58.6	1,669,200	41.4
39年	3,809,600	10,409	95	2,360,800	62.0	1,448,800	38.0
40年	4,168,715	11,421	109	2,360,800	56.6	1,807,915	43.4
41年	4,170,823	11,427	100	2,455,567	58.9	1,715,256	41.1
42年	4,232,000	11,595	101	2,701,800	63.8	1,530,200	36.2
43年	4,192,700	11,455	99	2,960,100	70.6	1,232,600	29.4
44年	4,388,000	12,022	105	3,173,000	72.3	1,205,000	27.7
45年	4,584,000	12,559	104	2,876,000	62.7	1,708,000	37.3
46年	5,118,300	14,023	112	3,424,200	66.9	1,694,100	33.1
47年	5,699,100	15,571	111	3,650,000	64.0	2,049,100	36.0
48年	6,035,100	16,535	106	3,679,000	61.0	2,356,100	39.0
49年	6,091,900	16,690	101	3,537,000	58.1	2,554,900	41.9
50年	6,013,100	16,474	99	3,378,000	56.2	2,635,100	43.8
51年	5,486,700	14,991	91	3,343,300	60.9	2,143,400	39.1
52年	5,497,700	15,062	100	3,388,000	61.6	2,109,700	38.4
53年	5,620,900	15,400	102	3,055,100	54.4	2,565,800	45.6
54年	5,879,800	16,109	105	3,346,200	56.9	2,533,600	43.1
55年	5,552,700	15,171	94	3,071,000	55.3	2,481,700	44.7
56年	5,953,500	16,311	107	3,120,100	52.4	2,833,400	47.6
57年	5,929,100	16,244	100	3,128,700	52.8	2,800,400	47.2
58年	6,229,900	17,068	105	2,983,400	47.9	3,246,500	52.1
59年	6,331,200	17,298	102	3,167,200	50.0	3,164,000	50.0
60年	6,763,100	18,529	107	3,120,100	46.1	3,643,000	53.9
61年	6,876,000	18,838	102	3,292,900	47.9	3,583,100	52.1
62年	7,268,500	19,914	106	3,267,600	45.0	4,000,900	55.0
63年	7,583,900	20,721	104	3,523,100	46.5	4,060,800	53.5
平成元年	7,538,400	20,653	99	3,266,900	43.3	4,271,500	56.7
2年	8,461,300	23,182	112	3,837,600	45.4	4,623,700	54.6
3年	8,955,600	24,536	106	3,941,800	44.0	5,013,800	56.0

(次ページにつづく)

年次	来遊客数 (A)	1日平均 (人)	対前年比 (%)	宿泊客数 (人)	Aに対する 割合	日帰客数 (人)	Aに対する 割合
5年	8,101,300	22,195	92	3,481,200	43.0	4,620,100	57.0
6年	8,087,200	22,157	100	3,604,100	44.6	4,483,100	55.4
7年	7,681,800	21,046	95	3,288,700	42.8	4,393,100	57.2
8年	7,946,600	21,712	103	3,572,400	45.0	4,374,200	55.0
9年	7,635,500	20,919	96	3,299,900	43.2	4,335,600	56.8
10年	7,387,100	20,239	97	3,275,400	44.3	4,111,700	55.7
11年	7,538,000	20,652	102	3,145,300	41.7	4,392,700	58.3
12年	7,219,000	19,724	96	2,911,300	40.3	4,307,700	59.7
13年	7,038,600	19,284	98	2,892,200	41.1	4,146,400	58.9
14年	7,170,000	19,644	102	2,912,600	40.6	4,257,400	59.4
15年	7,041,600	19,292	98	2,988,500	42.4	4,053,100	57.6
16年	6,752,100	18,448	96	2,772,900	41.1	3,979,200	58.9

資料2 平成16年外国人宿泊客数

(単位：人)

月	韓国	台湾	中国	アメリカ	その他	計	備考
平成16年1月	38	950	23	2	10	1,023	
平成16年2月	50	624	36		11	721	
平成16年3月	43	937	34	4	14	1,032	
平成16年4月	53	1,398	18	2	8	1,479	
平成16年5月	12	553	24	7	24	620	
平成16年6月	35	1,006	49	6	2	1,098	
平成16年7月	54	1,425	24	3	2	1,508	
平成16年8月	49	526	2		12	589	
平成16年9月	7	508	13	5	20	553	
平成16年10月	13	351	14	106	25	509	
平成16年11月	32	682	27	39	10	790	
平成16年12月	28	483	21	10	7	549	
平成16年合計	414	9,443	285	184	145	10,471	
対前年比	152.2%	267.0%	105.6%	136.3%	100.7%	240.3%	
平成15年合計	272	3,537	270	135	144	4,358	
平成14年合計	261	4,794	254	325	586	6,220	
平成13年合計	121	3,712	159	97	170	4,259	